

# 近現代史に学ぶ戦争について

明治(1867.12.9~)、大正(1912.7.30~)

昭和(1926.12.25~1945.8.15)

西村康裕

2018, 4

# はじめに

- 海外旅行先での博物館見学は楽しみのひとつだ。**ハワイ真珠湾博物館**では先の戦争に関連して日米の出会いには1853年のペリー来航から始まると展示されている。そして日本を敵国ながら尊敬すべき国(民族)と評価していた。
- 中国の**南京大虐殺博物館**は、先の戦争での日本人の悪行非道と残虐性をグロテスクに展示し、侵略された歴史を鏡にする碑文が印象的だった。
- ハノイ、ヤンゴン、クアラルンプール、シンガポールなどの博物館も植民地時代から独立解放までの間に日本との関わりが描かれていた。
- こうした感想から近現代史を学び直してみた。

# ハワイ真珠湾博物館

戦艦ミズーリ号

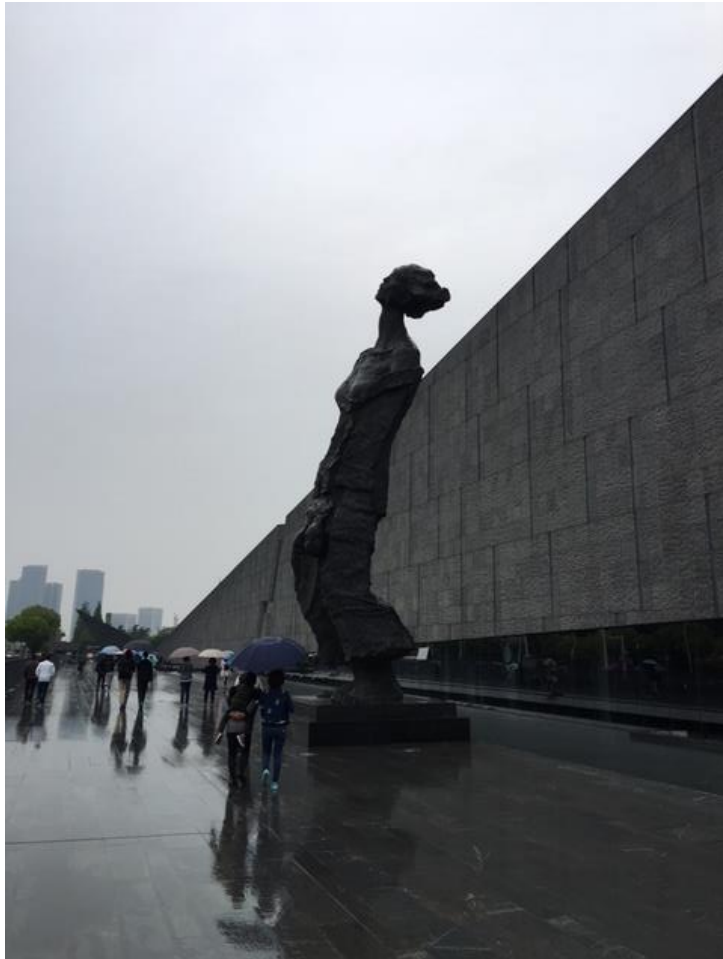


アリゾナ記念館



# 南京大虐殺博物館

## 博物館の入口



## 周恩来の言葉(中分と和文)

語

子, 历史的教

大屠杀历史事

人类文明的浩

性虐杀人性

与屠杀必然

难。我们永

要挨打, 永

下无完卵,

受侵略、人

们, 高举爱

国主义, 开拓

新色社会主

义, 维护世界

和平, 珍

爱和平, 斗!

結び

歴史は鏡であり、歴史の教訓を忘れてはならない。

侵華日軍南京大虐殺という歴史事實は、戦争は人類文明にとって大災禍であること、戦争は蛮行を生み出し、人間性を絶滅させる野蛮な行為であること、侵略と虐殺は必ず被害民族に災難をもたらすということを証明した。われわれは、国が弱ければ侵されるということ、果がひっくり返れば割れない卵はないということ、国家が侵略されれば、人民は災禍に遭うという歴史の教訓を、永遠に忘れてはならない。愛国主義の旗を高く掲げ、自ら励んでやまなく、未来を開拓し、中国の特色のある社会主義を建設するために、また、祖国の統一を実現し、世界の平和を守るために努力しなければならない。

戦争を遠ざけ、平和を愛し、調和のある世界を作るために、奮闘しよう！

# 明治という時代

- 江戸時代は、寺子屋制度で日本人の識字率は非常に高かった。そこに福澤ほか知識人が海外の優れた科学技術や官僚制度などを輸入し、驚異的速度で欧米列強の仲間入りを計った。国民各層上から下まで富国強兵と殖産興業に邁進し、猛烈に奮闘努力した時代だ。
- 政府は、岩倉遣欧使節など海外との交流を重視し、欧米の進んだ「文明」を受入れると共に「独立」を守ることに腐心した。

(明治政府はアヘン戦争後の中国の悲劇を早くから知り、帝国主義列強の侵略を恐れ、富国強兵に邁進した)

# 日清戦争

- 1894, 5 朝鮮半島で「東学党の乱」が発生。鎮圧の要請を受け日清が出兵したが、平定後も撤兵せず戦争に至った。
- 朝鮮は、清の属国の時代が長く続いていたが、日本の富国強兵の結果、朝鮮国内における日清の勢力が均衡していた。朝鮮の外交方針は、**事大派と開明派**に分かれ内紛が絶えなかった。
- この戦争は最初の帝国主義戦争で、日本の圧勝に終わり、多額の賠償金と台湾などを獲得した(下関条約)。ロシアの南進を恐れた日本は、防衛策として半島を緩衝地帯にしたい思惑があった。
- しかし朝鮮・台湾での民衆の抵抗は強まった。その後ロシアの三国干渉で、対露敵愾心が高まり「臥薪嘗胆」がスローガンになった。

# 日露戦争

- 1880年頃から欧米列強は植民地争奪競争に入り、日清戦争勝利で獲得した遼東半島をロシア他3国が返還を日本に要求(三国干渉)。ロシアはその代償として、清から大連・旅順の租借権と東清鉄道敷設権を獲得した。
- 1900年北京で「義和団の乱」が勃発、北京の列強公使館が包囲されたが、日本が鎮圧した(北京の55日)。
- 1904、2日本は仁川・旅順でロシア軍を奇襲し戦争になった。日本は苦戦するも1905に旅順、奉天で勝利し、日本海海戦でバルチック艦隊を全滅させた。

(ロシア国内では社会主義運動が活発化。日本も戦費が枯渇していた。米国の仲介で講和条約締結(ポーツマス条約)。この勝利でインドを始めアジア諸国の独立機運が盛り上がった。)

# 第一次世界大戦(1914~1918)

- 1914、6 第一次世界大戦勃発 3国協商(英仏露)対3国同盟(独伊墺)の大戦争へ
- 1915 対華21箇条要求(袁世凱しぶしぶ受諾) ドイツ領遼東半島と膠州湾を奪う

(日本はドイツ租借地を奪う。世界の覇権が英国から米国へ。全世界の戦死者は16百万で非戦闘員の死者6百万、負傷者20百万人と膨大。戦車・飛行機・毒ガスの登場。国家総動員の戦争形態に変貌する)



# 第一次世界大戦の影響

- 戦争形態の劇的変化(国家総力戦)、欧州の没落、アメリカの世紀、ソ連革命
  - 日米関係(石井・ランシング協定で合意するも、1910日英同盟破棄⇒孤立化へ(徳富蘇峰の落胆と日本単独覇権主義へ旋回)
  - 戦争特需(造船・製鉄業・海運業・繊維)と反動⇒戦争終結から貿易赤字に戻り、終戦2年後の1920から綿糸生糸暴落で恐慌へ
- (1920国際連盟創設。日本は常任理事国。労働条件改善、小作人争議と労働争議多発。中小銀行整理淘汰され金融中心の財閥組成が進む)

# 関東大震災1923(大正12)

- 東京を襲った大地震。この地震で在日朝鮮人3000人惨殺された。また亀戸事件(亀戸警察署内で社会主義者10人惨殺)
  - 甘粕事件(大杉栄、妻、甥の少年惨殺)⇒甘粕は3年懲役するも放免、その後満州で活躍
  - 虎の門事件(裕仁親王の狙撃事件⇒失敗)
- (大正デモクラシーといわれ、文化的華やいた時代の大震災だった。この震災は在日朝鮮人との関係を一層悪化させ、社会主義者の増加、労働運動が高まった)

# 世界経済悪化

- 1920 大正デモクラシーの風潮の下、全国普選期成連合会の結成、社会運動や民主化運動、デモが最高潮、憲政会・立憲国民党の普通選挙運動も活発
- 1922 鈴木商店倒産、台湾銀行休業、金融財閥(三菱、三井、住友、安田・第一)組成、1927金融恐慌、1928不戦条約など財政再建も
- 1929、10 NY発の恐慌⇒5000万人失業、英国の金本位制離脱、経済ブロック体制へ(植民地での資源争奪)⇒ファシズムと軍部台頭  
(地方の二男三男坊が徴兵され軍人へ、**欧米協調方針が後退し始めた**)

# 外交方針の変化

- 幣原外交(1924~27)は国際条約を尊重。しかし満州は馬賊など軍閥割拠でほぼ無政府状態。関東軍は治安維持の名目で勢力拡大した。
  - 1927、9蒋介石は、国民党から一時下野したが、9月に来日して田中首相他軍部と面談した。共産党を除くシナ統一と満州を分離して日本統治とすることで基本同意。その後国民党に再度復帰し広州から華北方面に侵攻した(北伐開始)
  - 田中内閣(1927~29)は対中強硬外交
    - 1927、6東方会議での結論①満蒙分離②中国統一妨害③日本の満蒙における特殊権益保護など
- (満州での日貨排斥運動と関東軍の勢力拡大⇒張作霖爆破、満州事変へと続く)

# 張作霖爆殺事件(1928. 6. 4)

- 満洲軍閥のリーダーである張作霖を爆殺。満蒙分離して満州の植民地化工作の一環。
- 「満蒙は日本の生命線」(松岡洋介の国会演説)との認識から関東軍河本大佐他の謀略(注; 2005年にコミンテルンとの共同謀略と判明)
- 当時の奉天総領事は吉田茂。満鉄総裁は山本条太郎。副総裁が松岡洋介)

(「満洲某重大事件」と呼ばれた。関東軍の謀略であったことは明白にも関わらず田中内閣は真相隠し河本を処罰せず⇒天皇の逆鱗に触れ内閣崩壊⇒欧州列強の反発と国際的孤立化を招く)

# 満州事変(1931, 9, 18)

- 1931柳条湖で張作霖の息子張学良が華北駐在で留守中に南満州鉄道を爆破した事件
- 関東軍に加えて在朝鮮駐留軍(5万余)が独断で満州に越境したので、全面戦争に発展(政府の不拡大方針はなし崩し。帝国議会も追認)

(軍部は、ソ連の経済成長に伴う軍備増強を懸念。他方で、ロンドン海軍軍縮条約締結などで軍事費縮小(リストラ)を懸念。満州は日本国土の3倍で資源も豊富で緩衝地帯として植民地化を計画していた(石原参謀など)。

# 満州国建国(1932、3、1)

- 溥儀を皇帝とする傀儡国家(ラストエンペラーとして映画化)
- 関東軍は対ソ防衛のために満州の植民地化を望んだが、対米関係の配慮で譲歩した(石原参謀他)。政府と軍部は「アメリカの民族自決主義に則り、満州を「独立国家にする」が落とすところと判断した。

(しかし中国にとって満州国は日本の傀儡国家であるとの認識強く、日中関係は絶望的悪化となる⇒日中戦争への道)

# 5・15事件(1932)

- 政党政治の腐敗と墮落(ロンドン軍縮条約を統制権干犯と攻撃。財閥はインフレ、満蒙投資、金輸出禁止、為替管理などで儲けた)
  - 1931、3月事件(クーデター未遂。非公表)
  - 1932、10月事件(桜会橋本、大川周明など)
  - 1932、血盟団事件(井上蔵相、団琢磨暗殺)
  - 1932、5・15事件(陸海軍兵士の犬養暗殺)
- (満洲事変の影響で軍部若手将校の気運が高まり、クーデター事件が多発した⇒国民は政党政治に不満で、軍部主導政治に期待が高まる)



# 皇道派と統制派の対立

- 軍部独裁体制を目指す軍部内の2大勢力
- 皇道派は荒木貞夫、真崎甚三郎、北一輝などで「昭和維新」を呼号
- 統制派は永山鉄山、東条英機などでクーデター方式を放棄するも皇道派の暴発を利用して権力強化に腐心。なお石原莞爾は東条の部下として満州国建国に貢献。但し終戦前に左遷
- 1936, 2, 26 皇道派青年将校1400名がクーデター(いわゆる226事件)。斎藤実総理、高橋是清蔵相、渡辺錠太郎を射殺。天皇のリーダーシップ。反乱軍として平定され幹部と北一輝は死刑。

# 当時の戦争観

- 1894の日清戦争の戦死者は1.4万(動員兵士20万人)、1905の日露戦争では11.5万人(同110万人)。戦争は1年半で終り戦闘員の死が殆ど。清朝からの賠償金2億テール。
- 第1次世界大戦では動員兵士80万人に対して戦死者300人と極めて少なく、山東半島と膠州湾の権益取得した。
- それまでの戦争は、限定的、間接的、短期で終結、賠償金・占領など権益は膨大だった。よって戦争で国民生活が向上するとの考えが広まる。

(しかし実際は英米関係悪化、経済水準は低迷、格差と貧困が続いた。張作霖事件以降の政府発表は真相を正しく公開せず隠蔽するようになった)

# 日中戦争(1937. 7)

- 226事件後肅軍の名目で統制派が軍部実権掌握
- 1936軍部大臣の現役武官制が復活、軍部の発言力強化⇒軍事費の激増(当初歳出の7割。終戦時には国家予算の数倍)、1937日独伊防共協定。1940三国同盟。
- 1937、7、近衛内閣は盧溝橋事件後、不拡大方針であったが、8月に軍部の圧力で撤回。
- 1937、11 華北占領するも共産党のゲリラ攻撃で膠着状態(南京事件は1937、12)
- 1939、5(ノモンハン)にソ連軍と軍事衝突するが敗退⇒南進に戦略変更
- 1938. 4 国家総動員法制定。思想弾圧強化。近衛内閣の「東亜新秩序声明」
- 1939～1940 戦争は膠着状態に

# あの戦争への道

- 1939, 7 日米通商航海条約破棄
- 1940, 7 対日輸出許可制から輸出禁止へ
- 1941, 4 日ソ中立条約と日米交渉(野村全権大使とハル国務長官)とハルノート
- 1941, 7 在米資産凍結、石油禁止
- 1941, 12, 8 真珠湾攻撃(日米開戦の火蓋)

(真珠湾攻撃の報を聞き、スターリンとルーズベルトは満足。チャーチルは「第二次世界大戦回顧録」で日米開戦を聞き歓喜したとのこと。蒋介石も同様であったろう。この攻撃は戦略的大失敗だった)

# 戦争の呼称

- 先の戦争を、「大東亜戦争」と呼ぶ人がいる。戦争が満州での様々な事件から始まり、明治以来の帝国主義勢力からの防衛目的であり、東南アジア諸国の列強からの独立支援の意義を強調したい考え方である。「15年戦争」もほぼ同様の考え方である。
- 「太平洋戦争」は、日米戦争に重きをなす考え方で、現在の教科書は殆どこれである。しかし「新しい歴史教科書」(扶桑社刊)は「大東亜戦争(太平洋戦争)」と両論併記している。
- 呼称でレッテルが貼られることを嫌う方は、「先の戦争」とか「あの戦争」と呼ぶ。

# アジア主義者の複雑な思い

- 三木清、竹内好、西田幾多郎などの「アジア主義者」は日中連帯を期待していたので日中戦争に反対した。逆に真珠湾攻撃の報道に、欧州列強のボス米国に戦争したことに拍手喝采した。
- 右翼の頭目、頭山満も満州国建国に反対した(満洲皇帝溥儀の来日パーティ参加拒否)⇒日中和平の理想論者であった。東亞新秩序を夢想。
- 日中戦争は「弱いものいじめ」で正義に反すると考える知識人は多かった。朝日新聞はじめとする新聞論調も対米強硬路線が主流だった。

(アジア主義者の国際政治感度はロマン的で情報と知見は幼稚であった。他方大川周明と石原莞爾は、日中戦争が日米戦争につながるとして批判。いずれも国際情勢センスは相当高かった。)

# 徳富蘇峰の「終戦後日記」

- 彼は、「近世日本国民史」など著書400巻に上り、近現代史の中で大きな影響を残した知の巨人だった。右翼思想の中心的人物といわれる。
- 「終戦後日記」は終戦から数年にかけて、「何故あの戦争に負けたか」を日記風にまとめた回顧録だ。蘇峰は、開戦時「あの戦争は負ける戦争ではない」と信じていたが、敗戦との結末を迎え自殺を考えるが、「何故負ける戦争を始めたか」に思い至り戦争の原因と政治体制などいろいろ教訓を残した。
- その中であの戦争について「明治時代の御代なら満州事変の如きは、断じて起こらず」とある。即ち満州事変から終戦まで、日本国に明治天皇のような指導者が不在だったことが第1の敗因と記している。

# 感想

- 近現代史を学び、人間のやること考えることは今も昔も余り変わらないように思う。従って歴史を学ぶことは大変意義がある。
- 国際政治に謀略は付き物だが、謀略史観は正しいとは思えない。歴史の大河は個々の謀略事件で遅らせたり早めたりすることはありうるが、流れは変わらないと思う。
- 自由と民主主義が根付いた我が国が、戦前の軍事独裁政治に戻ることはないように思う。しかしヒットラーや我が国も戦前選挙を経ていることに注意は必要だ。
- 先の戦争は張作霖爆殺事件を巡る田中内閣の対応と満州事変対応が転機であったと思う。対中不拡大方針の流れがこの後崩れた。あの戦争への道が繋がったと思う。



# 参考図書

- 日本史(近代・現代)2016:安藤達朗・佐藤優企画
- 昭和史2016:井上寿一著
- 昭和史発掘(3)1978:松本清張著
- 満州国演義1～4巻2007:船戸与一著
- 軍国日本の興亡1995:猪木正道著
- 昭和史<上>1993:中村隆英著
- 徳富蘇峰・終戦後日記2006、徳富蘇峰著
- 復興亜細亞の諸問題1922;大川周明著
- 誇れる祖国日本2012:元谷外志雄著
- 第2次大戦回顧録抄1965;ウイストン・チャーチル著(毎日新聞翻訳)